
日向の跡目(裏)

ユン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日向の跡目（裏）

【コード】

N5919Y

【作者名】

ユン

【あらすじ】

作者・ユンのもう一つの作品『日向の跡目』の裏の話です。

始まり

日向 一族の屋敷に赤子が産まれた。

名は『日向 ヒナタ』

現在の日向 一族当主・日向 ヒアシの愛娘にして次期当主…候補

火影様の命で日向 一族の影を守るよう依頼されたある暗部の話を…。

暗部

(暗殺戦術特殊部隊)

…火影直属木の葉の精鋭部隊

原作では分家の役割ですが…それは表向き。

此処では暗部が守るっていう設定です。

この話は『日向の跡目』の裏側のお話です。

もし宜しければ両方読んで頂ければ良いなあっと思っております。

作者・ユン

R I D E ・ 1 任 務

三代目に呼ばれ暗部の一人が火影の所へやってきた。

？「火影様」

火影「来たか…入って来い」

？「何か任務でしょうか？」

火影の所へ来たのはお尻が隠れるほどに伸びた黒髪の暗部服を着た人だった。

火影「藍魔…お主に頼みたくてな」

藍魔と呼ばれた暗部は小さくため息をした。

藍魔「火影の命ならば…」

火影「日向 一族当主に赤子が産まれる…その赤子の護衛をお主に頼みたくてな」

藍魔「赤子の護衛をですか？」

火影「そうだ！頼めるか？」

藍魔「…御意」

そう言い瞬身の術で姿を消した。

火影「藍魔…頼むぞ…赤子は…希望なのでな…」

火影様の屋敷を出た藍魔は小さな声で何かに話し掛けた。

藍魔「…一目連、仕事だよ？…今から日向の屋敷を覗いて来て？」

一目連「お嬢…了解」

藍魔「…骨女…貴方もいずれ仕事に加わって貰うから様子を見て来てね？」

骨女「お嬢…分かったわ」

一目連と呼ばれた何かと骨女と呼ばれた何かに話し掛けた藍魔。

日向の屋敷にやって来た一目連と骨女は姿が白眼でも分からぬよう姿を消しながら様子を伺っていた。

一目連「ねえ…骨女…この仕事いつまでかな？」

骨女「さあねえ…まあ…火影様の命が下りるまででしょ？」

一目連「長い道のりだあ…」

一目連はため息を尽きながら周りを観察していた。

骨女「…まあ…藍魔…お嬢の命でもあるんだし…文句は言えないね」

藍魔「…暗殺以外の任務とは…火影様は何を考えてらっしゃるのか分からない」

R I D E ・ 2 日向嫡子誘拐事件の裏側

いつものように一目連と骨女は日向の愛娘・ヒナタを見ていた。

一目連「ふあゝ…眠い…ねえ…骨女…なんであの子チャクラコントロールしてんの？」

一目連は欠伸をしながら隣にいる骨女に聞いた。

骨女「欠伸をするのは止めなさい！…まあ…3つの子どもがする事じゃ無いねえ？」

口元に手を当て考える骨女。

其処に二人の主が来た。

藍魔「二人ともご苦労様…？何かあったの？」

藍魔は二人の顔を見る。

一目連「お嬢…あの子チャクラコントロールしてるんですけど…火影様に言った方が良いのかなあ？」

藍魔「…今はまだ言わなくて良い…多分」

骨女「まあ…お嬢がそう言うなら…私らは何も言わないけどねえ」

藍魔「…チャクラコントロール」

藍魔は呟きながら愛娘・ヒナタを見ていた。

藍魔「…そういえば骨女…今日は和平の信者が来ているみたいだから、探つて来て？」

骨女「和平の信者を…分かったわ」

そう言うつと骨女は姿を消した。

一目連「ねえ…僕は一人で？此処に？」

藍魔「今日は…私もいる」

一目連「え…お嬢も？…やった！」

藍魔「…輸入道には九尾の子の所へ行ってもらった」

一目連「…九尾の子かあ…」

そう話しながら陽がくれるまで愛娘・ヒナタを見ていた。

陽が暮れてきた時、骨女が藍魔の側に戻ってきた。

骨女「お嬢…和平の信者がもうすぐ此処へ来るわ」

一目連「え？なんで？」

骨女「和平の信者とか言っておいて本当の目的が”日向の嫡子誘拐”の話をしてたわ」

藍魔「…誘拐」

一目連「あ！あの子出てきたよ」

一目連が指差す方には愛娘・ヒナタの姿があった。

骨女「ん？なんだい？…トイレに入って行っただけじゃないか」

一目連「あ…出てきた」

藍魔「…アレは分身体」

一目連・骨女「え？」

そう言いトイレの方を見ると出て行っただけの愛娘・ヒナタが出てきた。

そして縁側の下へ入っていった。

一目連「…もしかして…あの子…誘拐の事知ってんのかな？」

骨女「ま、まさか…ねえ…お嬢」

藍魔「骨女…仕事…和平の信者を始末する…木の葉の国境を抜けたら…連絡して」

骨女「お嬢…始末って…分かったわ」

そう言っただけ姿を消した。

そして分身体・ヒナタが誘拐された。

骨女の連絡により輸入道の力で国境を抜けると…

忍び「ん？なんだ？お前たち」

骨女「私らかい？どうする？名乗っとく？」

藍魔「…いや…いい…はあ…」

忍び「てめえらが俺たちの任務を邪魔すんなら相手になんぜえ？」

藍魔「闇に惑わし哀れな影よ…人を傷付け貶めて…罪に溺れし…業の魂…」

忍び「ツハ！何言ってるんだあ！」

藍魔「イツペン…死ンデミル？」

藍魔がそう言うのと其処にいた数人の忍びの姿が消えた。

そして…藍魔たちもその場から消え…国境付近に響く声が…

藍魔「…この魂…地獄に…流します…」

そして日向嫡子誘拐事件は終わり…通常の日向 ヒナタの護衛任務に戻った。

R I D E ・ 3 嫡子誘拐事件後の裏側

日向の屋敷に火影様が来られ、ヒナタが呼ばれた様子を見た一目連は藍魔に連絡した。

一目連「お嬢：来て：火影様が来たよ」

そう言う与其処に藍魔が姿を現した。

藍魔「どうしたの？昨日の件？」

一目連「多分ね」

様子を伺っていると火影様に呼ばれ、屋敷に入る。

火影「藍魔：愛娘・ヒナタが言っていた事は誠か？」

藍魔「：はい」

ヒアシ「その者は：どうした？」

藍魔「：此方の独断で：始末しました」

ヒアシ「つな！：始末」

藍魔「：はい」

火影「：どうするかのう：」

藍魔「：私の使い魔に変幻させ：後始末もさせますか？」

火影「：変幻？」

藍魔「：侵入して来た忍びに変幻させ：偽の報告を：」

ヒアシ「それで大丈夫だと？」

藍魔「：へまはさせません」

ヒアシ「火影様、どうします？」

火影「ウム：藍魔：お主の使い魔を呼べ：」

藍魔「：はい：輸入道：来て」

そう呟くと輸入道が姿を現した。

輸入道「お嬢：お呼びで？」

藍魔「：此処に侵入した忍びに変幻し：偽の報告を雲に：」

火影「：それとのおう：何かいるだろう：」

藍魔「…奴らの目的は…日向の血だと思えます…」

ヒアシ「血か…」

輸入道「…血でしたら…動物から多少生き血を…採って来ます」

火影・ヒアシ「生き血…」

藍魔「…駄目ですか？」

火影「…よ、良かろう…頼む」

藍魔「…輸入道…宜しく」

輸入道「御意」

輸入道はそう言つと姿を消した。

火影「…藍魔…引き続き…頼むぞ…」

藍魔「はい…では任務に戻ります」

そう言い姿を消した。

R I D E ・ 4 日向 一族宗家・分家

ヒナタ様の護衛の為、一目連と藍魔はヒナタ様とヒナタ様の世話役・コウの後をついて行く。

一目連「ねえ…お嬢？…あの世話役…コウだっけ？…僕たちの存在を知らないのかなあ？」

藍魔「…知らないと思う…知っているのはヒアシ様と火影様の二人だけ…」

一目連「…にしても…感知能力が優れてるんだよね？…日向 一族って…」

藍魔「…そうね」

一目連「なら…あの人…クビじゃない？」

藍魔「…」

藍魔は世話役・コウを凝視する。

藍魔「…クビにはならない」

一目連「どうしてさ？」

藍魔「…なんとなく」

一目連「…」

そんな話をしているとヒナタ様が怒鳴り声が聞こえ、走っていった。

一目連「追っ？」

藍魔「…当然」

藍魔と一目連はヒナタ様を追う。

夕方になり、ヒアシ様の弟・ヒザシ様がヒナタ様に声を掛けた。

ヒザシ様の後ろにはネジ様、申し訳なさそうにしているコウの姿があった。

何か話をし…屋敷に戻っていった。

一目連「喧嘩だったんだね？」

藍魔「そうね…」

R I D E ・ 5 あの子の話（裏側）

藍魔「…一目連…どう？」

一目連「…ん？…ああ…なんか…あの子…ヒナタ様だっけ…異様な…」

いつもの通りヒナタ様の護衛をする一目連と藍魔。

二人はヒナタ様の修行や生活に何か引つ掛かるモノを感じていた。

一目連「なんであんなに…修行すんのかな？」

藍魔「…私には分からない」

一目連「…だよ…僕たちとお嬢は修行には無縁だしね…」

藍魔「ええ…」

藍魔は地獄にいた…しかしある罰で…この里に送られた。

今、ヒナタ様は屋敷にて修行中…世話役・コウがお茶をいれて来たらしく…座談しているようだ…。

一目連「聞こえる？」

藍魔「…うん」

一目連は藍魔の横顔を覗くと…なんとなく…無理してる…と感じていた。

一目連「…お嬢…あのさあ…」

藍魔「…待つて」

一目連が藍魔に話し掛けたその時…ヒナタ様は世話役・コウに何か聞いていた。

ヒナタ様は”九尾のあの子”の話をしていた。

一目連「あれ？禁句の話だよ？お嬢…」

藍魔「そうね…」

一目連「火影様に伝える？」

藍魔「お願い」

一目連「OK…お嬢」

そう言つと一目連は姿を消した。

RIDE・6 あの子と接触

散歩中、ヒナタ様と世話役・コウは”九尾のあの子”と接触した。

理由は”九尾のあの子”の事だろうか：何やら集団子供たちに殺気を向けている。

一目連「あの歳でこの殺気…」

藍魔「あ…」

見ているとヒナタ様は守護八卦六十四掌つという技を子供たちに繰り出していた。

ヒナタ様はナルト君を日向の屋敷に住まわせるような話をしていた。

藍魔「…」

一目連「…お、お嬢？」

藍魔「何？」

一目連「ヒナタ様って…」

藍魔「何をどこ迄知ってるのかしら？」

一目連「あ、お嬢も思った？」

藍魔「ええ…そりゃあ…ね」

輸入道「…警護が楽になりますな…お嬢」

一目連「うわあ？輸入道…いつから居たんだよ！」

輸入道「つい先程からのお」

骨女「一目連、私もいるよ」

一目連「…」

藍魔「…」

一目連と藍魔は凝視しながら二人をみていた。

骨女「あ！移動するみたいだねえ」

藍魔「…追っ」

日向の屋敷に行くと火影様の姿もあった。

一目連「あの世話役・コウが呼んだのかなあ？」

藍魔「…見たいね」

R I D E ・ 7 提案と任務追加

ヒナタ様はヒアシ様、ヒザシ様、火影様、ネジ、ナルトの前でナルトを日向 一族の屋敷に住まわせるようと提案した。

一目連「…わぁ…なんか3つの子供に見えないよ…あの子…ヒナタ様」

骨女「女というもんは…そんなもんよ…いつの間にか成長すんのよ」

一目連「ふ〜ん…そんなもんなんだ…じゃあ…お嬢も？」

一目連は藍魔を見る。

藍魔「…私も女だから…」

骨女「…一目連…あんた失礼な」

一目連「…ごめん…そういう意味で言ったんじゃないんだよ…お嬢」

藍魔「別に…」

三人の会話を機から見ていた輪入道は…なにやら苦笑いしていた。

そんな話をしていると、火影様が屋敷から出てきた。

火影「藍魔…」

藍魔「はい…此处に」

火影「後でワシの屋敷に來い…仕事依頼を変える」

藍魔「…分かりました」

その日、新たな任務追加が言い渡された。

- 1 . ヒナタ様 援護
 - 2 . ナルトの 監視
 - 3 . 二人がアカデミー 入学したら…
- 3 については…今はまだ話せない…。

火影様とお話を終え、日向の屋敷に戻った。

火影「…頼むぞ…」

R I D E ・ 8 ナルトの真実（裏側）

里中にナルトが日向の屋敷に引き取られたという噂は一気に広まった。

そして…アカデミー入学まで毎日のように修行をしていた。

修行中、ナルトはチャクラを練ると変な感じがすると言い、ヒナタ様が白眼でチャクラの流れを見て驚いていた。

一目連「お嬢…火影様に連絡して来る…」

藍魔「…宜しく」

ヒナタ様はヒアシ様の所へ行きナルトのチャクラの事を尋ねた。

一目連が火影様に連絡した事で火影様が日向の屋敷に来られた。

そして…ナルトの真実を聞かされていた。

一目連「あ…あの子…取り乱してる…」

藍魔「でしょうね…」

話が終わった後、ヒナタ様はナルトと修行をしていた。

R I D E ・ 9 色々な事

ナルト自身が九尾の狐を封印していると聞いた後、ヒアシ様とナルトが話をしている事：世話役・コウに聞いたヒナタ様。

毎年誕生日に部屋に籠るナルト。

そして、ヒアシ様とヒナタ様、ヒザシ様、ネジ、ナルトだけで過ごす瞬間。

5歳になったヒナタ様はナルトとネジと一緒にアカデミー入学を決め：入学説明会に行ったり、入学に必要なモノを買いに行ったりと：修行以外に色々あった。

一目連「アカデミー入学：3つ目の任務追加だね……」

藍魔「ええ…今晚…火影様の所へ行く…三藁たちも来て……」

一目連「OK…お嬢」

骨女「はいよ…お嬢」

輪入道「ああ…お嬢」

三藁は藍魔の言葉に同意した。

R I D E ・ 1 0 3 つ目の任務を…

ヒナタ様、ナルト、ネジがアカデミー入学を決定となったので、藍魔と三葉たちは火影様の所へ行つた。

藍魔「火影様…」

火影「藍魔…彼奴らがアカデミー入学を決めた…」

藍魔「はい…見ておりましたから…」

火影「藍魔…お主に新たな任務を与える…ヒナタの護衛は無しにし…ナルトの護衛を任す…そして…アカデミーに入学してくれ」

藍魔「アカデミーに入学…では暗部は…」

火影「暗部は…時々頼む」

藍魔「…名前は…」

火影「本名で名乗ってくれ」

藍魔「…閻魔あい」

火影「ああ…頼む」

あい「了解しました…」

そう言い…閻魔あいは…屋敷から出た。

R I D E ・ 1 0 ・ 5 結 合

この物語を書かせて頂いているユンです！

『日向の跡目』と『日向の跡目（裏）』をこれから結合して書いていこうと思います。

今迄”裏”を読んで頂きありがとうございました。

また『日向の跡目（結合）』にて続きます。

『日向の跡目』はR I D E ・ 2 0で終了する予定です。

此処『日向の跡目（裏）』はR I D E ・ 1 0で終了です。

また新たに『日向の跡目（結合）』を書いていきます。

ただ、主人公は日向では無いですが、日向に関しては一応？げていこうとは思っていますので・・・。

では、失礼します。

b y ・ ユン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5919y/>

日向の跡目(裏)

2011年11月22日01時11分発行